

鉱山地域としての成り立ちや歴史

20 世紀初めの数十年間、岩手県北部の八幡平山地にあった松尾鉱山はアジア全域で最も産出量の多い硫黄鉱山であっただけでなく、生活共同体のモデルとしてもてはやされました。松尾鉱山は 1914 年に開山し、1950 年代半ばの全盛期には従業員 4,900 人を含む 15,000 人が、水洗トイレやセントラルヒーティング用ボイラーなど、当時としては類のない豪華な設備を備えた 4 階建ての近代的な鉄筋コンクリート集合住宅に生活していました。学校、大規模な病院、映画館も作られ、従業員の給与は全国平均を大きく上回っていました。会社の方針で山に酒屋や酒場はなく、標高 1,000 メートルで栄えた家族向けのコミュニティは「雲上の楽園」と称えられていたのです。

松尾鉱山で抽出された硫黄や硫化鉄鉱石は、肥料、殺虫剤、殺菌剤、接着剤、ゴム、レーヨンなどの繊維、アルバム、ろうそく、マッチ、フィルムケース、ピンポン玉、輪ゴムなど、産業用および一般消費者向けのさまざまな製品に使用されました。1930 年代半ばからは、松尾鉱山は硫黄の国内需要の 80%を満たし、海外にも輸出していました。しかし、第二次世界大戦後の経済自由化政策によって、海外のより安価な製品との競争が激化し、また硫黄が石油精製やその他の炭化水素処理の副産物として低コストで回収可能になったため、火山地帯から硫黄を抽出するという古いパラダイムは時代遅れになりました。こうして、松尾鉱山の「楽園」は 1969 年に事実上終わりを迎えました。

柏台にある松尾鉱山資料館は、1888 年の最初の試掘から始まる松尾鉱山の歴史に特化した保存・展示施設で、山に栄えた全盛期の鉱山社会に関する豊富な品々や資料が収容されています。展示物（説明書きはほぼ日本語のみ）からは採掘と精製過程が見て取れ、さまざまな技術や作業方法が年月をかけてどのように向上したか示されています。たとえば、鉄道輸送は手押し車や馬車からガソリン車、さらに蒸気機関車へと進化し、最終的には電化されました。また、松尾鉱山資料館では住民の携帯蓄音機やスライド映写機から、室内楽団、ホームパーティー、茶の湯の茶会、その他の文化活動まで、鉱山での生活の娯楽的な側面についても紹介しています。数多くの展示品の中には、昭和天皇が 1954 年にこの地に滞在された時にご使用になったシルクのベッドソックスや、1951 年に鉄道が電化された後に導入された 25 トン機関車も含まれています。

1969 年に松尾鉱山が閉山されると、1970 年には山にあった学校も閉校となりました。1,000 人以上の住民が居住していた木造の集合住宅は 1972 年と 1973 年に焼却され

ました。病院の建物は学習院大学がサテライト施設として使用していましたが、2006 年にこちらも取り壊されました。鉾山社会のかつての栄光のうち、現在では住む人のなくなった鉄筋コンクリート住宅の抜け殻だけが残されています。これらの倒壊しつつある建物は危険とみなされ、観光客の立ち入りは禁止されていますが、八幡平アスピーテラインの道路沿いから見ることができ、写真を撮ることもできます。